

## 産地織物の多品種化に関する研究

大島紬部 ○恵川美智子

### 1. はじめに

大島紬は平織の絣織物であるが、本研究では織物組織に検討を加え、大島紬の絣使いに対応する組織を開発し、三原組織（平織・斜文織(綾織)・朱子織）やその変化組織にすることで織物の多品種化を図り、産地織物の用途の拡大に繋げる。1モト越式の絣に対応組織する4枚組織に続き、今回は、2モト越式の絣に対応する6枚組織について検討を行った。

### 2. 実験方法

#### 2. 1 織物組織

織物組織は、大島紬の絣使いを基に経絣糸と緯絣糸の交錯する位置の組織を平織から変化させ浮き出す形の紋組織にして、更に紋部の組織を斜め方向に変化を与えた。(図1)

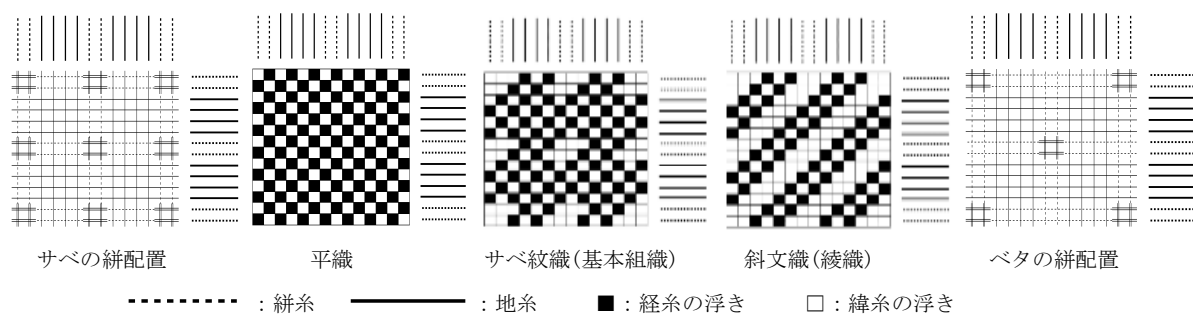


図1 絣使い

2モト越式の絣は、経糸の配列と緯糸の織り込みは絣糸2本・地糸4本が1順であり、それぞれ糸6本が1組になっている。このことから経糸6本×緯糸6本の範囲をブロック化し、組織を検討した。サベ紋織の基本組織を基に、紋部を斜め方向に①直進、②途中で向き変更、③途中でずらす3グループとした。紋部の浮きは紋部を延長し連続して浮かせる、紋部を縮める、紋部を延長し分割し飛び飛びで浮かせるパターンとした。ブロックは各グループ毎にサベの絣配置で並べ、組織を展開した。

#### 2. 2 紋絣（絣と織物組織の組み合わせ）

紋絣は2モト越式のベタの絣と展開した各組織の組み合わせを行った。

#### 2. 3 試験織り

展開した組織の試験織り（無地織物）と紋絣の試験織り（絣織物）を行った。

### 3. 結果

#### 3. 1 織物組織

織物組織は、1モト越式のサベ紋織の基本組織を基にした4枚組織では、紋部を斜め方向に「①直進」、「②途中で向き変更」をしたが、2モト越式のサベ紋織の基本組織を基にした6枚組織では、更に「③途中でずらす」が加わった。4枚組織で斜め方向変化組織は6パターン展開したが、6枚組織では15パターン展開した。4枚組織では、紋部を斜め方向に「①直進」で、紋部を延長し連続して4本浮かせると斜文織（4枚綾）となり、6枚組織で同様に6本浮かせると斜文織（6枚綾）となった。各グループの紋部を延長し連続して6本浮かせた場合の組織図を示す。(図2)

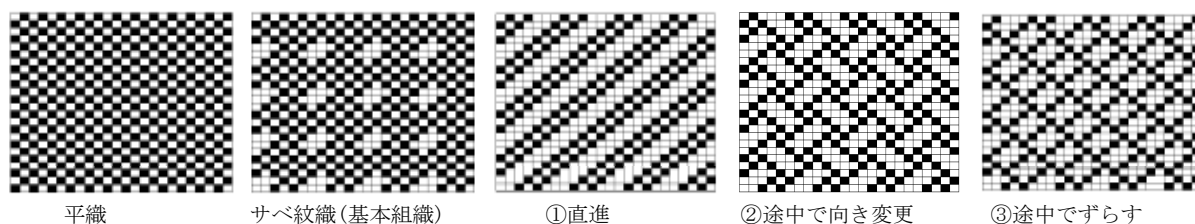


図2 組織図

### 3. 2 紋緋 (緋と織物組織の組み合わせ)

紋緋の緯糸の織り込みは、緋糸2本、地糸4本で行った。各グループの紋部を延長し連続して6本浮かせた場合の紋緋図を示す。(図3)

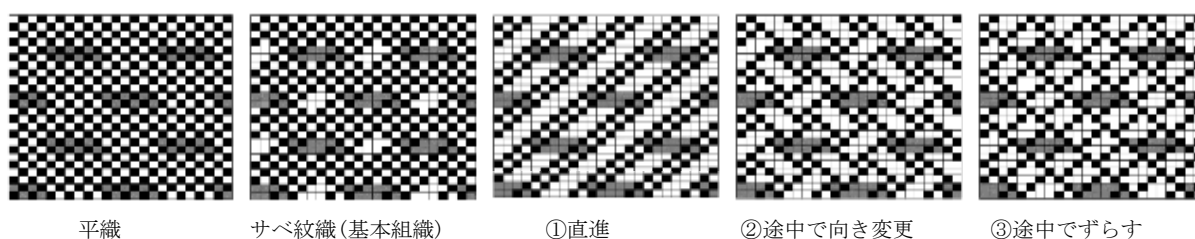


図3 紋緋図

### 3. 3 試験織り

組織図を基に織方図(織物組織設計図)を作成した。試験織りは大島紬用の高機を用い、綜統は地綜統に単綜統2枚と紋綜統に半綜統3枚を仕掛け手織りで行った。無地織物と緋織物それぞれに斜め方向変化組織15パターンの変化のある試験布を得た。平織より織布はふっくらとしており緋は浮きだし鮮明である。各グループの紋部を延長し連続して6本浮かせた場合の織布写真を示す。(図4, 5)

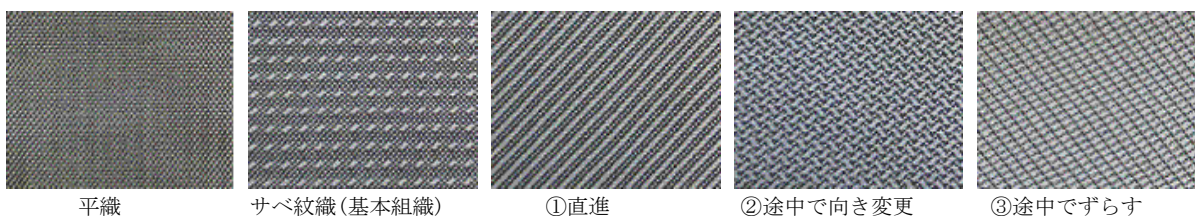


図4 織布写真(無地織物)

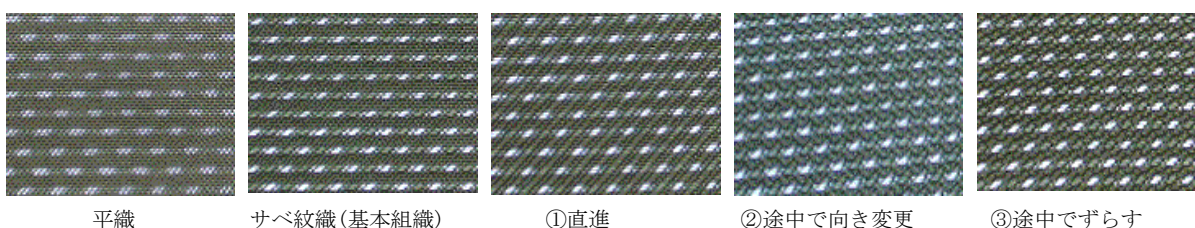


図5 織布写真(緋織物)

## 4. おわりに

今回は2モト越式でサベ紋織の基本組織を基に検討を行い、織物組織を6枚組織の斜文織(綾織)に展開した。15パターンの無地織物と緋織物の試織布は、組織の種類毎に平織とは地合が異なるので、用途の拡大が期待される。組織として浮き糸が多く組織点が少なくなると、織布はふっくらとしてしなやかになるので、2モト越式で基本組織より紋部の浮きの大きい変化組織についても検討を行い、織物の多品種化と用途の拡大に繋げたい。